

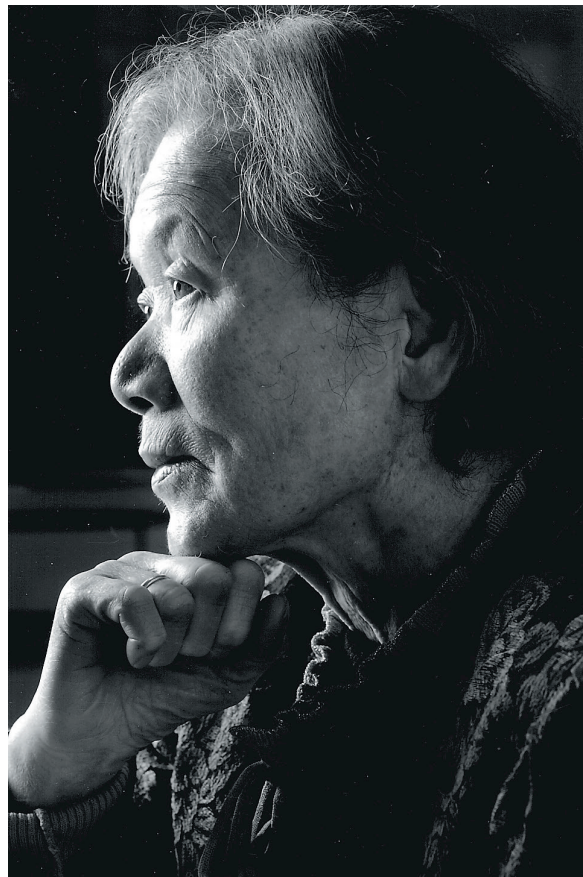
2023年第48回 視点 全国公募写真展



「ちよつと憂うつ」(5枚組)
若橋 一三 《入選》



「2022年終末時計100秒」(6枚組)
松本 アキラ 《視点賞》



「大和限界集落一人暮らし」(5枚組)
豆塚 猛 《奨励賞》



「チンドン稼業令和を行く」(5枚組)
野呂 彰 《優秀賞》



「やがて冬」(5枚組)
黒川 千穂 《奨励賞》

ヤング部門 あります			
視点賞	1名	土門拳揮毫「視点」額	(賞状と賞金 30万円)
奨励賞	3名		(賞状と賞金 10万円)
優秀賞	7名		(賞状と賞金 3万円)
特選	10名		(賞状と賞金 1万円)
ヤング賞	1名		(賞状と賞金 5万円)
準ヤング賞	3名		(賞状と賞金 1万円)
入選			(賞状と写真集「視点」)

写真はいずれも2022年「視点」の入選・入賞作品です



「お婆ちゃんはいつも此処に」(単) 花田 想乃子 《準ヤング賞》

個性豊かな写真を募ります
一人で何点でも応募できます

入選作品は東京都美術館で展示し
写真集「視点」に入選作品を収録し
入選者全員に贈呈します

作品募集 テーマ、内容は自由

単写真または最大8枚までの組写真
(ヤング部門は5枚以下)
写真サイズ A4または六切のプリント
応募資格にいったいの制限はありません

送付受付 2月11日(土)～3月3日(金)

展示: 東京都美術館 (上野公園内)

会期: 6月7日(水)～6月13日(火)

巡回展: 高知、兵庫、仙台、三重

主催 日本リアリズム写真集団(JRP) / 2023「視点」委員会

〒160-0004 東京都新宿区四谷3-12沢登ビル6F <http://www.jrp.gr.jp> Email: jrp@jrp.gr.jp

問い合わせ先 (13:00～18:00) TEL: 03-3355-1461 FAX: 03-3355-1462

第48回 視点 選考委員



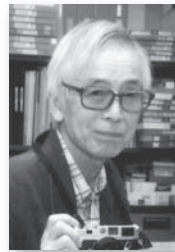
鈴木一誌

ブックデザイナー、映画評論家。杉浦康平事務所に12年間在籍後独立。第1回ダゲレオ出版評論賞を受賞。1998年、第29回講談社出版文化賞ブックデザイン賞を受賞。『知恵蔵』のフォーマットをめぐる裁判が朝日新聞社とのあいだで行われ、2001年、その記録をまとめた『知恵蔵裁判全記録』が刊行。2001年より戸田ツトムとともに雑誌『d/SIGN』の責任編集。『重力のデザイン 本から写真へ』(2007年、青土社)、『ブックデザイナー 鈴木一誌の生活と意見』(2017年、誠文堂新光社)。

え 画にならない時代

写真が岐路に立っている。世界で起きるさまざまなできごとが画にならず表象不能になっている。写真で写せない。

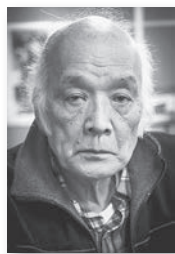
新型コロナの感染にしても、医療現場を写しても、あるいは人通りが減った渋谷のスクランブル交差点を撮影しても、それは直接、新型コロナを捉えたことにはならない。〈金融や円安やドル高は写真に写せるか。その事情は、写真ばかりではない。ブックデザインもが直面している問題である。安倍元首相を銃撃した山上容疑者の心のうちは、とうてい可視化できない。心象を風景に託すか、人びとの表情を観察するかが、風景も人びとの表情も、どう見るかは見るひとに委ねるにほかない。断定のしにくい時代である。断定をせずにどう伝えるか。〉



英伸三

1936年千葉市生まれ。農村問題などを通して日本社会の姿を追いつつ、1992年から中国の改革開放政策による変貌を追っている。伊奈信男賞など受賞。写真集『一所懸命の時代』など多数。JPS会員、JRP代表理事。現代写真研究所所長。

ふだん何ということもなしに接している事物も、ふとしたことから関心を持つと、面白い映像が浮上ってきてカメラを向けると、そこから新しい写真世界が広がります。今回は単写真にすぐれた作品が多くありました。今回はこれだと思える状況を切り取った一枚を、組写真はテーマに応じて枚数を絞り、内容を際立たせた力強い作品をお願いいたします。



金瀬 胖

1944年千葉市生まれ。主な関心事は社会の風景と音楽家。写真集『ZONE』、『EXPOSED 東海村感光録』、『浦廻』、『路上の伝記』ほか。写真展多数。写真の会賞など受賞。JPS 会員、JRP 代表理事。現代写真研究所教務主任。写真リアリズム編集長。

視点が通常のコンテストと異なる点は、上手さを競うものではない、ということだと考えている。上手さよりもっと大切なものがある。それは、写真で何を見たか、であると私は思う。

世界は人類史的な危機にある。その一方で人間の記録、記憶を消滅させる、つまり人間が人間に立ち返るのを困難にする、遊戯社会のパワー、文化的な壮大な仕掛けがある。写真は、そして「視点」は、記録し記憶する社会的な装置として大切なものになっていると思う。



中村 梧郎

フォトジャーナリスト。ベトナム戦争・枯葉剤を追及。元岐阜大学教授。著書「新版・母は枯葉剤を浴びた」(岩波現代文庫)。「戦場の枯葉剤」(岩波書店)。83年ニコン伊奈信男賞。05年科学JASTJ賞。07年NYでマグナム60周年招待作品展。JCJ代表委員。JPS 会友。JRP代表理事。

まさか、日本の政権政党がカルトと結びついていとは思いもよらぬことでした。そのもとで、私たちは物価高騰や低賃金、コロナに苦しめられています。社会状況は日ごとに変化しています。そうした中、誇らしい日本の光景や人間らしさを失いたくないとの思いは、誰もが抱くはず。その実態はカメラなら表現でき記録が可能です。身の回りにはたぶん意外なモチーフが潜んでいます。広い視野に基づく大胆なチャレンジを期待します。



金井 紀光

1950年生まれ。広島市出身。写真家助手を経てフリーカメラマン。現代写真研究所講師。主な写真展「非電化暮らし」J8.6「この町で」止まったままの時計一フクシマ10年」(共同制作)。2008年、2011年、2020年(共同制作)視点賞受賞。2007年、2018年視点委員長。

「視点」はコンテストなので、一定のハードルはありますが、全国の人に自分の写真を見てもらえるチャンスにもなります。私も発表の場として捉え、第一回目以降約40回応募してきました。今回は選考の立場に関わりますが、ワクワク、ドキドキは応募される皆さんと同じです。それぞれの現場で、切実な思いで撮った写真を、社会にどう発信していくかが「視点」の大きな役割。選考委員の責任も重いです。